

職員による自己評価

A 環境面

- 活動スペースや職員数など、『適切となっている』と『どちらともいえない』という意見で割れており、どこを基準において十分となっているのか、どのような役割で支援をしているのかなど共通理解の低さが課題と分析ができる。

B 児童への支援内容

- 業務改善や適切な支援の提供について、多くの質問に対し、『どちらともいえない』などの意見が若干見受けられ、全ての職員が十分に共通理解での支援ができていないことが分析できる。

C 関係機関との連携

- 家族とは日々の状況を伝え合い、共通理解はできているが、学校や外部の事業所などの関係機関との連携については、不十分である。

D 保護者への説明責任・信頼関係

- 保護者への説明や連携については、各職員の意見が割れている結果となっている。そのため、職員同士がどのようなことを取り組んでいるのか理解しきれていないことが分析できる。

E 非常対応

- 緊急時の対応や避難訓練など、非常時などの対応については、概ね対応ができているが、現在、対応が必要とされていない身体拘束や食物アレルギーへの対応については、『どちらともいえない』との意見が多くあった為、対応の意識低下の懸念ある。

保護者による評価

A 環境面

- 概ね活動スペースや職員数等の環境・体制整備の問題はない。しかし、バリアフリー化が適切に配慮できているかといった点については、若干数の方が「はい」とは言いきれない状態である。

B 児童への支援内容

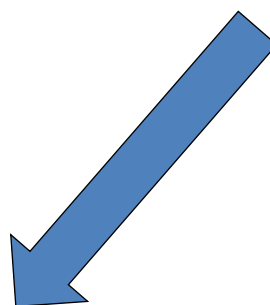
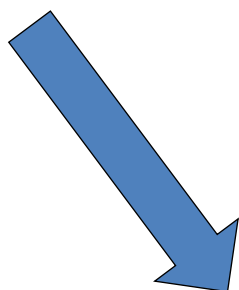
- ニーズ、課題を基に支援計画が作成されている。また、活動プログラムの工夫がされている。しかし、『放課後児童クラブや児童館との交流や障害のない子どもと活動する機会があるか』といった質問に対し、『どちらともいえない』という意見が多くあった。

C 事業所からの情報発信

- 日々の様子や支援内容など、概ね説明ができている。しかし、『父母の会の活動の支援や保護者会などの開催などにより保護者同士の連携が支援されているか』という質問に対し、若干、『どちらともいえない』と意見が多くあった。

D 非常対応

- 非常時対応については周知や説明は基本的にはできている。



事業所内での分析

【共通点】

P D C A サイクルはできており、支援計画を基に支援ができています。

活動プログラムに関しては、適切に組み立てができています。

障害がない子どもとの交流の場の機会がない。

家族と支援内容や日々の様子の共有はできています。

家族、事業者共に、回答として『どちらともいえない』との意見が目立った。

【相違点】

『環境面、体制整備』と『関係機関、保護者との連携』については、保護者と職員との回答に違いがあった。保護者としては、『はい』と概ね回答していただけているが、職員としては、意見が割れる回答となっていた。職員の共通理解が課題となっていると分析ができる。

分析・検討してみて…

事業所の強み

- 適切な方法で支援計画、記録の作成ができ、丁寧な支援ができる。
- 活動プログラムについては工夫ができる。
- 家族への情報提供はできる。

事業所の改善点

- 保護者からのアンケートの回答で、『ご意見』がほぼ記載がなかったことや、おそらく不十分な項目については、『どちらともいえない』と記載している保護者もいたと予想される。
- 職員の共通理解が低く、適切なチームアプローチをする事が課題です。
- 障害がない人との交流の場が少なく、地域社会への参加が十分にできていない。

事業所の改善への取り組み

- 保護者から事業所への意見がない事や、不十分な項目について、『どちらともいえない』との回答の多さから、保護者から率直な意見が言えない関係性だと思われる。その為、職員と保護者との適切な関係性を構築していく。
- 事業所内の課題であるが、職員同士の共通理解が低く、チームアプローチができていない為、共通理解ができるようなチーム作りに努めていく。
- 共生社会の実現に向けた後方支援を行う為、地域の行事への参加を検討していく。

～自己評価を行っての事業所としての感想など～

- 今回の自己評価を行い、「保護者との関係性の構築が不十分な事」、「職員の共通理解の低さ」が客観的に確認できました。自己評価を事業所内で振り返りを行う事で、職員ひとりひとりが、どのような取り組みが必要とされているのか気付かされ、職員の育成にも繋がりますと感じました。

事業所名 _____ ピース和田町 _____
担当者 所長 中原 裕介 _____